様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 １６ 日現在

機関番号：４４４２８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４７９７

研究課題名（和文）「素話」と造形表現活動を組み合わせた保育活動に関する実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on childcare activity combining SUBANASHI(Storytelling) and Artistic Expression activities

研究代表者
高橋　一夫（Takahashi, Kazuo）

常磐会短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：１０５８４１７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　保育現場において、言語表現活動の後に造形表現活動をおこなうという一連の保育活動案を提案した。言語表現活動では絵本の読み聞かせと「素話」を実践し、造形表現活動では油粘土と土粘土を使用した。
　絵本の読み聞かせから粘土の造形表現に繋ぐ活動では、子ども達の造形活動が手早く始まることがわかった。また、「素話」から粘土の造形表現に繋ぐ活動では、子ども達の想像力や創造力が高まることがわかった。
　一方、油粘土を利用した造形表現活動は、子ども達の個人的な表現に適していることがわかった。また、土粘土を利用した造形表現活動は、子ども達同士の協働的な活動が高まり、コミュニケーションが促進されることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　保育・幼児教育の重要性が世界的に認知されるようになった今日、日本社会においても質の高い保育実践が求められている。一方で日本の保育者は、求められている業務内容が多岐にわたるため多忙を極めており、十分に保育活動を検討する時間が不足している。
　そこで、保育者が子どもの想像力や創造力を伸ばすことができる質の高い保育活動を実践できるように、言語表現活動と造形表現活動を組み合わせた保育活動を提案した。２つの保育活動を繋ぐことで、保育者にかかる負担に見合った保育実践に昇華することができ、さらに、子ども達の集中力が途切れない充実した活動を展開できることが明らかになった点が本研究の学術的・社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：We proposed a series of childcare activity plan to carry out artistic expression activities after language expression activities at childcare. In language expression activities, Nursery teacher practiced picture book readings and "storytelling", and in artistic expression activities, children used oil clay and soil clay.
It was found that children's artistic activities started quickly in the activity using picture books. In addition, it was found that children's imagination and creativity increased in the activity of connecting "storytelling" to clay figure expression.
On the other hand, it turned out that artistic expression activity using oil clay is suitable for children's personal expression. In addition, it was found that artistic activities that use soil clay enhance collaborative activities among children and promote communication.

研究分野：保育・幼児教育

キーワード：素話　言語表現　粘土　造形表現　協働活動　コミュニケーション

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「素話（すばなし）」とは、昔話などの口承文芸を源流に持つ、保育者の語りだけで成立する言語表現活動である。ところが、「素話」に関しては先行研究が少なく、保育現場においての実践も著しく減少している。申請者らがおこなった先行研究[1]では、その要因のひとつに物語を覚えて語らなければならない「素話」の特性があることを突き止め、単独の保育活動として設定するには、保育者が大きい負担を感じてしまう活動であることを明らかにした。

他方、粘土を活用した造形表現活動は、粘土を素手で触ることにより、子ども達の指先を中心とした触覚を強く刺激できる活動である。しかし、粘土造形表現の指導には高い専門性と技術が必要とされるため、本格的な造形表現活動を避け、他の活動と活動の合間を繋げるだけの簡単な活動となっている現状がある。

そこで本研究では、以上のような状況を解消するため、子ども達が「素話」を聴いた後に、粘土を使った造形表現活動をおこなう、という一連の保育活動を提案する。

それぞれを単独の保育活動として考えた場合は、保育者は過度の負担を感じる。近年、保育現場の保育者に求められる業務が多くなっており、子どもの保育活動を計画する時間が十分に確保できないような状況にもなっている。子ども達が充実した時間を過ごすことができる保育活動を提案することができれば､保育現場の保育者の負担を軽減することにも繋がるといえる。

言語表現活動のひとつである「素話」と造形表現活動の粘土を使用した遊びを、一連の保育活動として捉えることで、より大きな枠組みで保育計画を設計することが可能となり、子ども達にとっても充実した活動となる。そのため、子ども達の創造力や表現力をより豊かに養成することができ、保育者が実践する保育活動に関わる負担に見合った活動として捉え直すことができるといえる。保育におけるカリキュラム構成・開発の視点からも大きい意義がある。

[1] 保育現場における「素話」の活用に関する実証的研究（平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金　基盤研究（C）課題番号 24531045　研究代表者 高橋一夫）

２．研究の目的

保育者の語りだけで成立する「素話」は、子ども達の豊かな想像力を養うことができる言語表現活動である。また、粘土を活用した造形表現活動は、子ども達の指先を中心とした触覚を強く刺激することができる。しかし、この２つの活動には高度な指導力が求められ、準備にも時間がかかるため、単独の保育活動としては保育者から敬遠される傾向にある。

そこで、本研究では「素話」と粘土を活用した造形表現活動を組み合わせた一連の保育活動案を新しく提案する。そして、本研究の目的には、(1)提案した保育活動案の有効性の検証と、(2)保育者の負担に見合った、活用できる保育活動案として保育現場に還元する、という２点を設定する。

３．研究の方法

平成 28 年度は、本研究の基礎部分となる、(1)「素話」から造形表現活動に繋げる保育活動の案の構築と、(2)その効果測定を中心に研究を進める。

平成 29 年度は、１年目に構築した「素話」から造形表現活動に繋げる保育活動案を保育現場で検証し、実際の保育現場での実践に耐えうる保育活動案の完成を目指す。研究成果については、保育学会を中心とした国内学会、PECERA などの国際会議で発表し、各分野からの助言と指導を仰ぐ。

平成 30 年度は、本研究の最終年度であり、立案した保育活動の精緻化を進める。また、研究の総括を行い、学会発表を含め学会誌などに成果報告をする。

４．研究成果

本申請の一連の研究から､「素話」と造形表現活動を組み合わせた保育活動に関して明らかになった知見は、大きく分けると次の５点である。

(1)子ども達の集中力が十分に発揮される点

提案した「素話」と造形表現活動を組み合わせた保育活動においては、参加する子ども達の集中力が継続し、豊かな活動となることが実証実験から明らかになった。したがって、実際の保育現場においても十分に実践が可能であり、子ども達の成長を支えることができる保育活動であると結論づけられた。

具体的な保育活動としては、活動の最初に 5～15 分程度の「素話」の実践をおこない、その後、20～40 分程度の粘土を活用した造形表現活動に繋げる、という内容である。そのため、活動の合計時間は､およそ 45 分間になる｡この時間は､幼児にとっては決して短いものではない。ところが、子ども達は喜々として活動に参加し、いずれの実証実験においても集中し続ける様子が確認できた。その背景には、先行研究の知見によって選定された「素話」の題材と、粘土自体が持つ素材の魅力があると指摘できる。

子ども達は、本研究で提案した保育活動案を通して、楽しみながらも長時間集中できる力を獲得することになる。この力は、非認知能力のひとつとして注目されており、幼児期の終わりまでに身に付けたい力のひとつでもある。さらに、保幼小の連携や保育現場から小学校段階への円滑な移行を目指すうえでも重要であり、本研究で提案した保育活動案は、現在の日本社会から求められる質の高い保育活動であるといえる。

(2)現代の子ども達をも惹きつける昔話の力が明らかになった点

「素話」の題材選定については、本研究では昔話研究や図書館学の知見から昔話を採用した。これは、昔話は物語の筋が明快で幼児が理解しやすいという理由があるためである。また、口承文芸として口伝えで語られてきた昔話は、保育現場における口承文芸ともいえる「素話」にも適している。そのため、本研究が提案した活動案の実証実験においても４歳児と５歳児ともに「素話」を聴くことに対して集中力が維持された。

保育現場における「素話」の実践が減少しているが、子ども達の集中が途切れにくい昔話を題材に選択することが保育者の「素話」の実践を支えるポイントになるといえる。また、同時に、子ども達にとっても話の筋を理解しやすい昔話を耳から聴くことは、内容理解の促進とともに想像力の向上にも繋がる利点がある。

(3)粘土という素材の魅力が明らかになった点

粘土という素材自体に、子ども達を強く引き付ける魅力があることが再確認できた。粘土は形を自在に変化させることができる。もし、子ども達が気に入らない場合は、すぐに作り直すことが可能である。描画活動のように一度描いたものは取り消しができないのではなく、都合よく改変することができる。この自由度は子ども達にとって大きな魅力である。

さらに、粘土を手で触った時の感覚から、子ども達は多くのことを感じることが可能である。硬さ、冷たさ、においなどが子ども達の感覚を強く刺激する。このような粘土という素材の持つ魅力が、子ども達の活動に対する集中力を継続させたと指摘できる。

粘土の素材としては、油粘土と土粘土の２つが保育現場で使用できるが、まず、油粘土を利用する場合の利点は、保育現場の子ども達が個人用（500ｇ）のものを持っていることが多いため活用しやすいという点である。そのため、適した活動の形態としては、子ども達が個々人で造形表現をおこなう場合だといえる。

一方、土粘土を活用する場合の利点は、日頃から頻繁に触ることのない土粘土の感触を子ども達が喜ぶ点である。また、適した活動の形態としては、油粘土よりも大量の粘土を使用しやすいため、子ども達が複数人で造形表現をおこなう場合だといえる。

(4)子ども達同士のコミュニケーションが高まる点

子ども達は「素話」を聴くことで内容を理解し、物語の状況を想像する。そして、粘土の造形活動で、想像した内容を立体物として具現化する必要が生じる。その際、子ども達は近くの者同士で会話をし、自分自身がどのように想像したのかを語り合う。そのコミュニケーションを通じて、頭の中で理解したものをより明確化し、さらに粘土の造形として具現化する。言葉や身振り手振り、さらには保育室にあるすべてのものに集中し、これまでの自分自身の経験などとも結び合わせるという活動をおこなう。

これらの複雑な活動を通して、思いを伝える、話を聞く、想像する、創造する、過去の経験と結びつける、といった子どもの成長にとって欠かせない能力を駆使していることから、子ども達の成長にとって欠かせない保育活動案であることが理解できた。

(5)２つの保育活動を繋ぐ価値が明確になった点

以上のように、「素話」と粘土のそれぞれが持つ魅力がかみ合った保育活動案は、準備に時間を要するなど保育者に負荷がかかる。しかし、提案した保育活動では、子ども達は集中力を発揮しながら活動を楽しむことができる。そのため、保育者は準備の負担感に見合った保育活動であることを実感することができる。

近年、保育者には様々な業務が求められ、専門的な対応が期待されている。そのような多忙な状況下で、十分に日々の保育活動を検討する時間が不足している。保育者が求めるのは、準備に負荷がかかったとしても、子ども達の成長を支えることができる意味のある保育活動である。この点に関して、２つの保育活動を繋いだ意味がある。つまり、本研究で提案した「素話」と粘土の造形表現活動を繋ぐ保育活動案は、保育者が求める活動案であったといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

①高橋一夫、糠野亜紀、平野真紀、白波瀬達也、「素話」と粘土の造形表現活動を繋ぐ保育活動の効果について、『常磐会短期大学紀要』第 47 号、2019、pp.51-64
②白波瀬達也、高橋一夫、子どもの造形表現における「素話」と粘土活動に関する研究、『常磐会短期大学紀要』第 47 号、2019、pp.41-50
③高橋一夫、白波瀬達也、保育者の豊かな言語表現活動を支えるために－「素話」の実践に関わる緊張を可視化することの意味－、『常磐会学園乳幼児教育研究会　研究誌』第 35 号、2019、pp.44-57
④白波瀬達也、平野真紀、高橋一夫、子どもの粘土活動による造形表現に関する研究－４歳児と５歳児の模倣の相違に着目して－、『常磐会短期大学紀要』第 46 号、2018、pp.71-80
⑤高橋一夫、糠野亜紀、平野真紀、白波瀬達也、子ども達の協働活動を誘発する言葉に関わる保育内容－土粘土の造形表現と組み合わせた「素話」を通して－、『常磐会学園乳幼児教育研究会　研究誌』第 34 号、2018、pp.41-54
⑥高橋一夫、白波瀬達也、言葉を重視した言語表現「素話」と粘土の造形表現を組み合わせた保育活動－５歳児クラスでの実践を通して－、『常磐会短期大学紀要』第 45 号、2017、pp.65-74

〔学会発表〕（計 12 件）

①Kazuo TAKAHASHI、Aki KONO、Maki HIRANO、Tatsuya SHIRAHASE、“A study on the effect of storytelling and picture books on clay play of children : focusing on clay play of children aged 5”、Pacific Early Childhood Education Research Association 18th Annual Conference（Malaysia）、2018/7/8

②Tatsuya SHIRAHASE、 Maki HIRANO、 Kazuo TAKAHASHI、“Difference between 4 years old children and 5 years old children in clay play: clay play after listening tale by storytelling”、Pacific Early Childhood Education Research Association 18th Annual Conference（Malaysia）、2018/7/8

③高橋一夫、糠野亜紀、平野真紀、白波瀬達也、「素話」から粘土の造形表現活動に繋ぐ保育活動－４歳児と５歳児における物語の捉え方の違い－、日本保育学会第 71 回大会、於：宮城学院女子大学、2018/5/13

④佐々木由美子、佐々木美和、相澤京子、高橋一夫、大谷真理子、保育者養成における児童文化財、日本保育学会第 71 回大会、於：宮城学院女子大学、2018/5/13

⑤白波瀬達也、高橋一夫、子どもの粘土造形と「素話」の関連について－４歳児と５歳児の協働活動に着目して－、日本保育学会第 71 回大会、於：宮城学院女子大学、2018/5/12

⑥高橋一夫、糠野亜紀、平野真紀、白波瀬達也、「素話」と粘土の造形表現活動を組み合わせた保育活動について－４歳児クラスでの実践を通して－、日本保育学会第 70 回大会、於：川崎学園（川崎医療福祉大学他）、2017/5/21

⑦白波瀬達也、高橋一夫、平野真紀、子どもの造形表現活動からみる「素話」と粘土の関連性、日本保育学会第 70 回大会、於：川崎学園（川崎医療福祉大学他）、2017/5/20

⑧齊藤崇、高橋一夫、白波瀬達也、真鍋健、古川伸子、保育者の話す力と子どものイメージの育成を考える－素話・絵本・造形活動から保育実践につなげる－、日本保育学会第 70 回大会、於：川崎学園（川崎医療福祉大学他）、2017/5/20

⑨高橋一夫、糠野亜紀、平野真紀、白波瀬達也、「素話」と粘土造形表現を組み合わせた保育活動の提案、全国保育士養成協議会第 55 回研究大会、於：いわて県民情報交流センター「アイーナ」、2016/9/26

⑩白波瀬達也、糠野亜紀、平野真紀、高橋一夫、「素話」と絵本の読み聞かせの相違点に関する研究－子ども達の粘土造形表現に注目して－、全国保育士養成協議会第 56 回研究大会、於：いわて県民情報交流センター「アイーナ」、2016/9/26

⑪Kazuo TAKAHASHI、 Aki KONO、 Maki HIRANO、 Tatsuya SHIRAHASE、“Consideration about the effect of clay play after having heard a story by storytelling”、Pacific Early Childhood Education Research Association 16th Annual Conference（Thailand）、2016/7/9

⑫Tatsuya SHIRAHASE、 Aki KONO、 Maki HIRANO、 Kazuo TAKAHASHI、“Analysis about the clay play after having heard a story, a comparison between the story telling and the picture book”、Pacific Early Childhood Education Research Association 16th Annual Conference（Thailand）、2016/7/9

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：平野　真紀
ローマ字氏名：(HIRANO,maki)
所属研究機関名：常磐会短期大学
部局名：幼児教育科
職名：教授
研究者番号（8 桁）：70342201

研究分担者氏名：糠野　亜紀
ローマ字氏名：(KONO,aki)
所属研究機関名：常磐会短期大学
部局名：幼児教育科
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：60342268

研究分担者氏名：白波瀬　達也
ローマ字氏名：(SHIRAHASE,tatsuya)
所属研究機関名：常磐会短期大学
部局名：幼児教育科
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：90512385

(2)研究協力者
研究協力者氏名：金田重郎（同志社大学大学院理工学部教授）
ローマ字氏名：Kaneda Shigeo

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。